哲學研究　第六十一號　第六卷第四册

感情の内容と意志の内容

西田幾多郎

現今一派の哲學者の云ふ樣に、作用、内容、對象などの區別して見ると、それ自身に於て全き具體的經驗は作用と作用との直接の内面的結合であつて、此立場に於て反省せられた經驗内容が我々の意識内容であり、嘗て論じた如くその純なるものが感情の内容であり、藝術の内容であると云ふことができると思ふ。併し私は屢意志の内容をも作用の作用の立場に於て現れ來る經驗内容であると云つた。私は意志の内容と感情の内容との區別及び關係について考へて見なければならぬ。例へば、藝術の對象としての愛と實生活に於ける愛とは如何に異なるか。美は人生自然の發露に過ぎない、此外に美と稱すべきものはないであらう。併し美は我々の行爲の理想

とすべきものではなく、又美しきものも之を欲望の對象とすれば忽ちその美を失ふ樣にもなる。ロメオとジューレットとの愛は美しい、否フランチスカとバオロの愛も或は美と稱することができるであらう。併し此等は直に行爲の規範とすべきものでもなく、又彼等は美を求めて相愛したのでもない。彼等の愛は彼等に於て實生活に於ける嚴肅なる事實であつたのである

一

具體的眞實在は自發自展的であつて、所謂內容と作用とは離すことのできない兩方面である。一つの色から一つの色を區別する色自身の働きが我々の視覺作用であり、一つの音から一つの音を區別する音自身の働きが聽覺作用である。單純なる作用の立場に於ては、作用と內容とは一であつて、作用自身は意識せられないであらう、知る者は知るもの自身を知ることはできないのである。併し具體的眞實在は作用自身の無限なる連續である。作用の作用の立場に於て作用と作用との結合が成立ち、此立場から我々は作用自身を反省することができるのである。これが我々の所謂意識現象である。作用の作用の立場とは我々が內に體驗することのできる自

由意志の立場であつて、かゝる作用の内容として成立する實在はその本質に於て自由であると考へることができる。自由とは超自然的といふことを意味するのである。自然的因果律を超越することを意味するのである。私が嘗て精神現象はすべて實體なき作用、卽ち作用自身の統一であると云つたのは之に由るのである。併し此の如き獨立自由の實在にも種々の階級のあることを認めねばならぬ。單純なる作用に於て内容の發展に無限の程度を認め得る如く、作用自身を内容とする作用に於て、作用の發展及びその自由に無限の程度を認めることができる。所謂知覺の如きものであつても意識現象として自由なる人格的基礎の上に成立し、單に自然現象として說明できぬのであるが、我々の人格は知覺に於て自由であると云ふことはできぬ。その創造性は單に衝動的たるに過ぎない。想起、想像などに至れば、作用の創造性は漸々明となり、その内容も人格的となるのであるが、此等の作用に於ても我々の人格が未だ眞に自由の域に達したといふことはできぬ。通常、心理學に於て云ふ如き意味に於ての想像は對自然的自由であつて、未だ超自然的、適當に云へば包自然的自由といふことはできぬ。唯自覺作用に至つて始めて作用が全然その對象界を超越して己自身の對象

界を創造することのでき、眞に作用の作用たる具體的立場に立つと云ふことができる。所謂自然界はその中に含まれて唯その一象面を成すに過ぎないのである。パスカルの人は萬物の中でも最も弱い葦に過ぎないが、併し人間は考へる葦である、全宇宙が彼を壓殺する時でも、人は己の死することを知るが故に、彼は彼を殺すものよりも貴いといふ如き語も、實に這裡より出て來るのである。此立場に於て客觀界は全然自我の所作となり、之と共に相對的自我は消磨されて客觀界の中に沒入するのである。我々は學問的良心、藝術的良心、道德的良心の發動の上に於て之を自證することができるのである。

私は單純なる作用の立場に於ては、作用と對象とが一であると云つた、作用自身が未だ反省せられないと云つた。無論嚴密に云へば單純なる作用といふ如きものはないかも知れない。單なる數の要素と考へられるものも一つの Operator と考へられねばなるまい。同一性質の色が單にその强度によつて區別せられると考へられる場合でも、單に性質が强度的に加はるのではなく、作用と作用との對立と見るべきであらう。すべて獨立なる對象は作用であつて、その相互の內面的關係卽ち之を對立せしむるものは作用の作用である。併し純なる一つの統一の上に立つ時、卽ち一

つの作用が働く時、作用自身は反省せられない。眼は眼自身を見ることはできない。假令作用が分析し得らるとしても、その統一が純なる時、卽ち內面的に結合せられ居る時、一つの作用と考へることができる。統一が純粹であるとか、結合が內面的であるとかいふことは、統一作用其物が創造的となることである。作用自身がそれ自身に固有なる無限の對象界を創造することである。それではそれ自身に於て創造的なる作用の作用の立場に於て、不純なる作用の結合といふごときものは何處から起つて來るか。作用の不統一は何によつて生ずるのであるか。すべて關係と關係の要素とは同一性質のものでなければならぬ、作用と作用の內容とは同性質のものでなければならぬ。自由創造を本質とする作用の作用の內容として現れ來るものはその一々が自由でなければならぬ、一々の要素の根柢に自由意志を藏して居なければならぬ。如何なる點に於て作用の結合其物を對象とする作用の作用の立場と、單なる作用の統一の立場と異なるか。前者の立場に於ける對象と、後者の立場に於ける對象と如何なる點に於て異なるか。作用の作用の立場に於ては、作用の不統一の上に統一が見出されるのである、不調和の上に調和が見出されるのである。此立場の上に現れ來るものは不統一の統一、不調和の調和である。これが獨立自由なる實在

の本質であり、すべての意識現象の根本的本質でなければならぬ。物理的に赤く見ゆべきものが赤く見えなかつたり、眞直に見ゆべきものが眞直に見えなかつたり、論理的に必然到達すべき結論に到達しなかつたりする所に、精神現象の存在理由があるのである、精神現象の本質は矛盾の統一にあるのである。無論錯覺幻覺など其他多くの精神現象が生理學的に又は生物學的に説明し得られるであらう。併し斯く説明し得らるゝ範圍に於てそれは精神現象ではなくなるのである。かゝる説明のできない剩餘が意識現象である。意識せられるといふことはかゝる統一以上の統一が成立することである、非合理的なるものゝ合理化である。單なる作用の統一は如何に複雜であつても此點に於て作用とその根本的性質を異にして居る。恰も有限數は如何に大くあつても超限數とその立場を異にして居ると一般である。私が嘗て知識は有限なる作用統一の上に立ち、感情は無限なる作用統一の上に立つと言つたのも此意味に外ならぬのである。

私は意識現象とは作用の不統一の統一、不調和の調和であると云つた。目的的統一といふのも此の如き不統一の統一でなければならぬ、目的的統一の背後には何時でも精神的意識が認められねばならぬ。生命といふ如き目的的統一が實在として

考へられるには、精神的實在が考へられねばならぬ。唯その統一が未だそれ自身にて獨立自由となつて居らぬのである、未だ内面的でない、具體的統一の域に至つて居らぬのできる。卽ち矛盾の統一が未だそれ自身にて實在として働いて居らぬ、現象卽實在ではない。此點に於て所謂生命は尙自然力と其類を同うするのである。目的的統一といふことは全體が働くことである。目的的因果に於ては最後に現れ來るべきものが始から働きつゝあるのである。此全體が偶然的と考へられる時、それが機械的となり、それが單に考へられた統一に過ぎない時、それが自然的目的となり、それが直接の事實となる時、意識現象となる。私が嘗て意味卽實在が精神現象の本質としたのも此意味に外ならない、意味とは全體の統一である。

向に作用が内面的に統一せられた時、縱、それが複雜であつても、一つの作用としてそれ自身に於て創造的であると云つた。斯く作用が純なる一つの作用として獨立となるとは、一方から見れば、作用が個人的立場を離れて超個人的立場に入ることである卽ち意識一般の立場に立つことである。數學的知識の如き場合は云ふまでもなく、藝術の如き場合に於ても、藝術的作用が主客合一にして創造的であると云ふことは超個人的となると云ふことである。此方面から見れば、作用の内面統一といふとは

超個人的立場に入ることであると考へることもできる。併し斯く作用が內面的に統一せられると云ふこと、卽ち個人的立場を超越するといふことは、他方から見れば自己の外面化であつて、此の如き作用の統一は作用の個性化に依らねばならぬ。超個人的立場を統一するものは個性である、自由なる人格である。作用が純化せらるれば、せられる程、作用はそれ自身に於て完全となり、互に獨立となる、卽ち一方から見れば不統一となるのである。此の如き一般化的傾向卽ち客觀化的方向を超越し、之れを統一するものは個性卽ち主觀でなければならぬ。一般なるものゝ一般は個性的なるものでなければならぬ、我々の自我が卽ちそれである。我が我の經驗內容を純化し、客觀化し、一般化して行くのは同時に我が我の奥底に達し行くことである。眞の自我は斯くして現れ來るのである。自己が自己を省みる一つの働きの中に全自己の發展が含まれて居る如く、一つの現實の中に全體が統一せられるのである。個性的統一とは働くことである、我は我を超越する卽ち我の外に立つ客觀界を我の中に入れるには働かねばならぬ。我とこの筆との統一は此筆を以て書くことである。行爲によつて我は一般的なる客觀界を統一することができる。此時我々は無限なる一般的關係の統一から働くのである。

我々が働くとか働かれるとかいふことは、物と心、卽ち主觀界と客觀界とが對立し、此兩界が結合統一せられることを意味するのである。主觀的中心から客觀界を統一し得た時、我が働いたと考へられ、之に反する場合には我が働かれたと考へられるのである。客觀界とは如何なるものであるか。所謂客觀界とは意識一般の上に立つ對象界である。主觀的中心といふのは之に反し最も特殊的な偶然的な結合の中心である。我が働かれたといふことは一般的な客觀的な中心から統一せられたことであり、我々が働いたといふことは特殊的な偶然的な中心から統一することであると考へられるのであるが、物には物の法則があつて我々は物の法則に從はないで、一物の位置をも變ずることはできぬ。之に反し、自我の立場より云へば、窓なきモナッドの如く、宇宙の大を以てしても我々の一つの意志をも動かすこともできぬ。我が物を動かすには、物が我の中になければならず、物が我を動かすには我が物の中になければならぬ。意志の作用が成立するには我々は物心兩界を超越し統一する立場に立つと考へねばならぬ。意識一般の立場を超越することによつて我は働き得るのである。意識現象のみ眞に能く働くものと云ふことができる。我々好惡、希望、欲求等は皆此の如き物心兩界の統一の世界に於て現れ來る現象である。かゝる統一

の可能によつて此等の現象の成立を認め得るのである。主意說の心理學者の云ふ如く知的作用も一種の意志と考へることができるのである。右の如き立場に立つては所謂客觀界は唯自我實現の手段として存在するのである。我々は十全なる知識を得ることによつて能働的となると云はれるが、我々の自我は泣かず笑はずすべての情緒を超越した一般的統一ではない。唯一の我として愛し嫉み喜び悲む所に眞の自我はあるのである。何人の我でもない我といふのはない。一般的客觀界を手段となすといふことは卽ち働くといふことは一般なるものを特殊化することである。欲求とはかゝる統一の形式である。欲求の形に於て或一點を中心として一般的なるものが結合統一せられるのである。一般的なるものゝ統一は或方向に動くことである。

我々の個性的自我に對して打ち克つべきものとして前に立つものは、單なる對象界ではなくして既に作用の世界でなければならぬ、單なる對象界は自我に對立することはできぬ。自我に對立するものは自我である。物は欲求の對象として始めて我に對立するものとなる。意識一般の統一によつて成立する客觀界が自然界として我に對立するのも、統一作用たる意識一般が作用として我に對立するが故であ

る。我々が自然を動かすとか動かされるとかいふのも畢竟此内面的統一作用と結合如何を意味するのである。作用が内面的に統一するといふことは、個々の作用が唯加法的に結合するのではない、此等の作用の結合の上に新なる意味を創造し獨立の對象界を構成する一つの作用となることである。斯くして自然の法則も我々に對して運命として人間味を生じ來るのである。すべての客觀的性質の成立にはその根柢に欲求があると考へねばならぬ。視覺的欲求によつて色の世界があり、觸覺的欲求によつて物の世界がある。作用が實在的となるには欲求の形を取らねばならぬ。實在は意志の闘爭である。ヘーゲルの云つた如く實在は矛盾であり、矛盾が深ければ深い程、眞實在であると考へることができる。何となれば内面的統一が深くして自動的なればなる程、自己自身の中に矛盾を藏するが故である。自己が客觀的對象界と戰ふとか、これに打克つとかいふのも、要するに自己が自己の中に生ずる矛盾に打克つことである。自己を動かすものは自己であり、自己は自己の中に「自己」を實現するのである。自然は單なる自然として我々の欲求の對象となるのではない。自己の肉體的狀態すら直に欲求の對象とは云はれない。快樂其物すらも單なる對象としては直に欲求ではない。意志とは自己の一狀態から他の狀態に移り行

くことである、自己の中に統一をもとめつゝ自己の統一を破り行くことである。此の如き無限の過程に自己の本質があり、その目的がある。我を動かすものは我である。作用の內面統一といふのは自己が自己の中に統一を求めることであつて、我々の欲望の滿足といふのは不統一の狀態から統一の狀態に達することであり、此の如き統一其物が又直に破らるべき課題となる。我々が內面的統一に進む時、我々は主觀的世界から客觀的世界に進むと考へられる、卽ち我々の主觀的欲求が客觀的世界に實現せられると考へられる。何となれば我々が客觀的世界といふのは作用の內面的統一の對象界に外ならないからである。併し意志の滿足は意志其物の死である。自己の內面的統一は自己の客觀化であつて、自己の消滅に過ぎない。自己の內に自己を省みる向內的作用は直に自己發展の向外的作用となる。自己に於ては內面的統一は直に不統一を意味するものでなければならぬ。

我々の自我は無限なる作用の統一である。我々の自我の根柢には達することのできない深淵がある。作用の作用の立場は單なる作用の統一に對しては、極限點の位置に立つのである。此の立場は一方から見れば一つの作用として統一することのできない全然非合理的な自由意志の立場である。是故に此立場の對象界として

我々に全然非合理的と考へられる經驗事實の世界も成立するのである。此世界は理性の對象界ではなく意志の對象界である。此對象界を統一するには我々は行爲の立場に立たねばならぬ、卽ち不統一の統一の立場に立たねばならぬ。實踐我の立場に於てのみ、此對象界に打克ち之を統一することができるのである。而して此立場に立つて全對象界を統一するといふことはその內容を特殊化することである。ライプニッツが神は無限なる可能的世界から、此唯一なる現實の世界を、意志によつて創造したと云ふ如く、特殊なるものは非合理的であり、眞に非合理的なるものは自由意志に基くものである、否、自由意志其物である。理性の法則に從ふが故に自由ではない、一般的經驗內容を特殊化するが故に意志は超自然的であり、自由である。向に私は特殊なる個人的立場を超越して意識一般の立場に到ると云つたのは、對象化せられた個物的自己の立場を超越することを意味するのであつて、一方から見れば我々は到底特殊の立場を離れることはできない。一般的なるものは特殊的なるものゝ反射である。內に照せば照す程、外に明なる反射を見るのである。特殊なるものがその達すべからざる深い根柢に入れば入る程、一般的となる。特殊的なるものは自己を一般化することによつてその特殊的なることを明にするのである。個物的

自己の立場を超越するといふのは要するに自己の中へ深く入り込むことに過ぎない。一般的なるものは自ら動くものではない、特殊的なものゝ動く過程であり、その内容である。

二

感情の要素の性質は快と不快との兩種に限られ、其他の差異は之と結合する知識内容の性質によると考へる人もあるが、感情は感情自身の立場に於てそれ自身の内容を有し、藝術によつて表現せられる如く却つて纖細にして明晰なる内容を有するのである。而して感情といふのは上に述べたごとき作用と作用との直接の結合であつて、感情の内容とは作用の作用の立場に於て即ち行爲的統一の立場に於て現れ來る自我の内容、生命の内容であると思ふ。感情の内容は主客合一の立場に立つて即ち行動の統一の立場に立つて始めて現れ來る内容である。行動の意識なくして感情の内容は成立せない、少くとも衝動的意識の上に感情が成立するのである。此故に感情の内容は純なれば純なる程、特殊的であり、知識内容と根本的なその性質を異にして居る。生物が如何に變化し行くかを豫見する能はざる如く、畫家がカンバ

スに臨んで自ら如何なる書ができるかを知ることはできない。行動的統一は超限數的統一である。是故に知識の立場に對して到達すべからざる深みであり、知識の立場に於て矛盾するものも此立場に於ては積極的内容を有するのである。

我々が感情から働く時、非合理的に働くと考へられる、衝動的生活は盲目的と考へられる。之に反し我々が數學的眞理の如きものを考へる場合、個人的自我の立場から超個人的立場に入る、卽ち情意の立場を離れて理性の立場に入ると考へられる。併し我々が理性的に考へるとは、自己が自己の中に入ることである、自己が對象化せられるのを避けて自己自身の純活動に還るといふことでなければならぬ。而して作用と作用との純なる結合の狀態は無限の不安であり、論理的矛盾である。我々の思想は内面的矛盾によつて發展するのである。思想は徹底すればする程、矛盾に陷り、自己自身を破壞して後、更に一層高次的なる立場に於て生きるのである、卽ち更に新なる積極的内容を生じ來るのである。翻つて考へれば、はじめ思想をして矛盾に陷らしめた物は實にこの高次的立場の内容であつたのである。矛盾の場合に於いて一般的なるものは如何なる位置を取るか。二つの經驗内容を矛盾せしめるものは具體的一般者である、卽ち綜合的全體である、統一者其物である。矛盾は作用の

對象化から起るのである、作用が自己自身を自己の對象界に射影しようとすることから矛盾が生ずるのである。白から黑を識別する視覺作用に就いて色を論ずべきものでない。とすれば矛盾に陷らざるを得ない。而もそれ自身に於て獨立で創造的なる眞實在は實に此の如き無限の矛盾である。斯く矛盾は具體的一般者卽ち統一者の內面的發展の要求から起るとするならば、一般化的作用が實在に於て如何なる位置を取るかを知ることができる、眞實在に於て分析と綜合とは如何なる關係に於いて立つかを明にすることができるであらう。有が有として自己を維持し無が無として自己を維持する所に、明なる轉化の內容が生ずる如く、或內容が自己を維持するといふのは一般的妥當性を要求することである、一般的認識を要求することである、自己を一般化する事である。斯く各內容が己自身に還り自己に純なれば純なる程、綜合的全體の內容が明となる。內容の分析が進めば進む程、積極的統一が明になるのである。明晰なる分析のない統一は眞の統一ではない、混合に過ぎない。分析には何時でも綜合的統一が豫想せられねばならぬ、これが分析の目的となるのである。我々が自己の經驗內容を分析するには內容を超越し、之を否定した立場の上に立たねばならぬ、卽ち知的自我の立場に立たねば

ならぬ。併し此方向に進み行くことは自己が自己發展の過程として、深く自己自身の中に沈み行くことである。此方向に於て現れ來る對象界は眞の實在ではなく、眞の實在界は目的統一の世界にあるのである、情意の形に於てあるのである。我々は徹底的に知的方向に進むことによつて最も明なる情意の內容に達するのである。

知識の立場に於ては、一般的なるものゝ中に特殊的なるものが含まれると考へられるが、具體的なる眞實在に於ては特殊なるものゝ中に一般的なるものが含まれると考へねばならぬ。一般的なるものは特殊的なるものゝ發展の手段である。一般的眞理といふのは我々の個性の根柢たる大なる個性の發展の過程に過ぎない、卽ち文化的發展の手段である。此時眞理は單なる眞理ではなく、力であり、實在である。此力によつて眞理は眞理自身を維持するのである。作用が內面的統一に進む時、所謂個人的立場を超越すると考へられるのは之に由るのである。我々の人格の奥底は無限に深い、人格の流には始まる點がない。此の如き超限數的統一の人格の上に立つ對象界が有限數的統一の人格的內容に對して、作用を超越する純客觀的世界と考へられるのである。是に於て心內と心外とが相對立するのであるが、之を統一するのが我々の行爲の立場である。行爲とは一般的なるものを特殊の中に入れると

を意味するのである、一般的なるものを特殊化する所に自我があるのである。併し自然が我々から自己實現の手段として見られる時、行爲の立場からして尙十分の統一に達して居らぬ。眞の文化に於ては客觀界が全然主觀の中に入らねばならぬ、因果關係その儘が目的的統一の中に入らねばならぬ、自然は全然精神の表現として見られねばならぬ。人間が機械を用ゐ始めた時、精神が物體界を征服し始めたと考へ得るのであるが私は文化は自己其物の變化に始まると思ふ。かういふ意味に於て藝術が文化の始であると考へることができる。藝術に於ては自然は手段ではなくして目的其物である。藝術は自然の背後に自己の生命を見出すのである。藝術が遊戲から始まると考へられるが、我々は之によつて始めて受動的生活を脫し得るのである、否自然と相對的位置を離れて作用の作用たる高次的立場に立つのである。此處にすべての文化的精神の基礎が建てらるのである。實利的生活に於ては客觀界は自我に對して何等の生命のない物質の世界と考へられ、自己の手段として用ゆべきものと考へられる。若し所謂客觀界が眞に自我と何等の關係なきものならば、自我は自我として獨立に自己を發展すべきであるが、自己の客觀界は自己其物と爾無關係のものではない。自己は客觀界に人格的內容を認めることによつて自己自

身の内容を發展するのである、他を人格として認めることは自己を人格として認めることである。他を物質として見る間は、自己の物質欲の外、何物でもない。かゝる立場に於て如何に自然を征服し得たとしても、自己其物に於て何の得る所もない、同一なる自己の無意義なる繰返しに過ぎない。我々は自然の中に精神的生命を認めることによつて卽ち藝術的直觀によつて自己自身の生命の內容を變することができる。而も斯く客觀界に感情を移入するといふのは新なる統一を客觀界に附與するのではなくして、實は具體的全體に還るのである、迷へる子がその父に歸るのである。藝術的創作はかゝる意味に於て內外兩界の行爲的統一である、此點に於て實利的行爲と根本的にその性質を異にして居る。往々藝術的創作が本能作用に比せられるのであるが、本能的生活といふのは實利的生活と同一性質である、實利的生活の核を成すものは本能的要求である。唯本能的動作が無意識と考へられる點に於て藝術的創作と似通ふ所があるのであるが、無意識といふ中に二樣の意義あることを注意せなければならぬ。本能動作は反概念的であるが、藝術作用は超概念的である。前者に於ては自己は自然から壓迫せられ、後者に於ては自己は自然を脫出するのである。本能的生活に於ては我々は大なる自然力の上に立ち、藝術的作用に於ては我

々は純なる愛の上に立つのである。藝術的創作の根柢には大なる人性の愛がなければならぬ。愛の根柢は超概念的なるの故を以て無意識と考へられるのであるが、純なる愛の無意識といふのと盲目的本能の無意識といふのは同一ではない。愛の根柢には對象によつて動かされない深さがある、愛の根柢は何處までも清澄でなければならぬ、樹上から己を殺すものゝ爲めに祈り、右の頰を打つものに對して左の頰を出すごとき心の沈着がなければならぬ。而して此の如き心の打ちつきは實に深い人性の理解から出て來るのである、人間の欲望の根柢に透徹するより來るのである。知の理解は概念に於て自由であるといふことならば、愛の理解は行爲に於て自由であるといふことである、卽ち行爲の本質の理解でなければならぬ。而して此處に到るには、我々は一度理性の立場を通過せなければならぬ。本能作用も主客未分と考へられるが、理性的立場を自己の中に包容して居らぬ、從つて全客觀界を超越し之を統一することはできぬ。親の愛は愛の最も純なるものであらうが、その非合理的なる點に於て私欲である。之に反し戀愛の如きもドストエフスキーの「虐げられた人々」に於ての如く愛人を愛する故に、その愛人の愛人と結婚せしめたと云ふ如きは愛の最も純なるものであらう。純なる愛は極めて合理的でなければならぬ。所謂

客觀的世界も實は知的愛によつて生ずるのである。子供は理解する前に先づ模倣すると云はれる様に、知的理解の前に作用と作用との直接の結合がなければならぬ、論理的理解の前にも思惟作用の直接の結合がなければならぬ、卽ち規範意識がなければならぬ。此の如き作用の自覺が愛の感情である。知識に於て矛盾の統一は行爲に於ては愛の統一となる、愛に於て自他の欲求の矛盾が統一せられるのである。愛の統一は、行爲の世界に於て、知識發展の根柢たる直觀にも比すべきものである。愛の内容は欲求の具體的統一の内容である。我々が抽象的立場に立つて具體的全體の内容を統一しようとする時、我々は解くべからざる矛盾に陷らざるを得ない。我々は自分の立場からその欲求を貫徹しようとする時、自分に對して無限大の自然が對立するのである。この大自然は自己に外面的と考へられるが、その無限なる延長と考へられるものは具體的統一の超限性に過ぎない、要するに自己をして自己たらしめるものである。我々の前に立つ暗い自然は自己の陰影に過ぎない。我々は愛によつて自己を人格化すると共に、此影を滅することができるのである。

我々が理性的となるといふことは我々が自己の自然性に打ち克つことである。自分の欲求が盲目的であるといふことは自分が自分の對象界に屬することであり、

卽ち自己が抽象的であることを意味するのである。自分が小なれば小なる程、自分は對象界に限定せられ、本能的となり、無力となる。すべての物が反自己的となるのである。我々が理性的となるといふのは此立場に打ち克つことであるから、一方に於て自己を超越すると共に、深く自己自身の中に入込むことである。併し知識の立場に於ては、我々は徹底的に對象界を打ち克つことはできぬ、盲目的自我はいつまでも背後からその影を射影して居る。我々が愛によつて對象其物の根柢に徹する時、全然對象界を打ち克ち、盲目的自己を滅することができるのである。此時知識の立場も眞理に對する愛の立場であつたことが明となる。斯く自己を打ち克つ要求は何から起るかと云ふ疑も起るであらうが、眞の實在は無限なる內面的矛盾である。矛盾を自己の中に有するものが人格である。理性的要求といふのは、總合的全體がその要素自身を互に相矛盾せしめ、その要素自身の中から自己自身を現す綜合的全體の要求である。要素は之によつてそれ自身にて矛盾に陷り、自己自身を滅して全體の新生命に到るのである。唯、理性の火は實在の根柢を照し盡すことはできない。我は單に理解ではなくして、悲む我、喜ぶ我である。我の根柢には無限の喜、無限の悲がある。我々は內と外とに無限なる時の延長を有つ、外に見られる無限の時は、我々

の心の奥に潜める無限なる時の射影に過ぎない。斯く我々の心の奥に連なる内面的連續は限なき深奥なるが故に神秘的ではあるが反自己的ではない、無限なる人格の光を帯びて居る、無限なる愛の根柢である、藝術家の眼に映する自然の深さ、宗教家の感ずる神の高さである。我々は之と結合することによつて自己を失ふのではなく、自己を生かすのである。物の全體を動かす綜合的統一が眞の具體的實在であるとするならば、眞に實在を動かすものは物力ではなくして愛である、人格的力であると云ひ得るであらう。我々は深き愛によつて無限なる人格の流に合すると共に、客觀的對象界を自己の中に包容し得て、眞に特殊の中に一般を含むことができるのである。カントは美の本質を反省的判斷作用に求めたが、特殊が先づ與へられるとしても一般の中に特殊が包攝せられた時、尙單なる知識的合目的に過ぎない自然の合目的性と擇ぶ所はない。唯特殊の中に一般を含むことを得て、はじめて藝術的內容となるのである。

三

私は以上述べた如き考を基として意志と感情との內容の區別及び關係について

論じて見たいと思ふ。感情は普通に無意識的と考へられるが、感情が無意識といふのは物力の不可知的と云はれる如き意味と異なるのみならず、本能の盲目的といふ如き意味とも同一ではない。私は藝術の内容となる純なる感情の立場に於ては、抽象的にして單に客觀的なる物力の立場、否本能の立場をも超越して、純粹に具體的精神内容の立場に立つと思ふ、卽ち純粹活動なる作用の作用の立場に立つのである。我々の文化生活は實に藝術的作用より始まると考へることができる。若し廣義に於て意志を精神的内容の能働性といふ意義に解するならば、我々がかゝる立場に立つ時、既に意志の立場に立つと云つてよいのである。唯狹義に於ての意志が感情と區別せられる所は、その目的が明に意識せられ、存在を目的として居る點にあるのである。

藝術家が純粹視覺の立場に立つて此立場に徹底する時、自ら全身の機關を動かし來つて、一つの表現運動となる。此時感興内に溢れて藝術家自身にも自己の表現作用の行衞と意味とが分らない。外から見れば本能や物力の無意識と同樣にも考へられるであらう。併し内面的には全然立場の轉換を認めざるを得ない。藝術に於ては我々は全く自由我の上に立つのである。外界はもはや其手段ではなくして表

現である。その達すべからざる深さは自然の深みではなくして、自我の深みである。此立場からは所謂物質界も人格的作用の一なる知的作用の表現に過ぎない。我に對して立つものは大なる自然ではなくして、大なる人格である。感情移入といふのは此立場に達することを意味するのである。人體寫生がすべての畫の基礎となるといふのも之によるのであらう。道德的行爲の立場に於ては、かゝる人格的内容が意識的となるのである、卽ち概念的に明となるのである。藝術の内容は道德的意識に對しても恰もオンに對するメー・オンであると考へることもできる。意識せられなかつたものが意識的となるといふことは如何なることを意味するか。普通には意識の對象が意識作用を離れて存在し、意識は鏡の如く之を映すものゝ樣に考へられる。併しかゝる考は概念の實體化であつて、實在は作用の中に對象を含む一の事行あるのみである。對象から云へば作用は對象の内面的關係と考へられるであらうが、作用から云へば對象とは作用自身の内面的限定に過ぎない。その無限に限定する方面が主觀的作用と考へられ、無限に限定せられる方面が客觀的對象界と考へられるのである。併し右の如き作用の特殊的限定の根元として、作用を統一する作用の作用を考へねばならぬ、卽ち廣義に於ての意志を考へねばならぬ。意識は廣義

の意志の立場に於て、卽ち作用の作用の立場の上に於て成立するのである。意識は小なる立場と大なる立場との矛盾衝突より起る、包容的なるものと被包含的なるものとの矛盾衝突より起るのである。正しく云へばかゝる矛盾の統一が意識である。一般的なるものを特殊化する所に意識が現れるのである。

藝術的作用に於ては我々は全然意識一般の立場を超越するが故に自然界として之に對立し矛盾するものはない、此點に於て藝術的作用は無意識とも云ひ得るであらう。無論その無意識は物力の無意識とは同一ではない、藝術的內容は人格的活動の潛在的內容である。無限なる發展の可能を含む數理をは我々が之を自分の中にあるものと感ずる如く、我々は藝術的內容に對しても自分の中にあるものとして、之に親味を感ずるのである。併し意志に於て目的が意識的となるには人格の自覺といふものがなければならぬ。人格の自覺は他の人格を認めることによつて成立つことができる。一つのみの人格といふものはない、人格は二つ以上なければならぬ。藝術的作用の立場に立つ時、既に自己に對立する自然を人格化して見るのであるが、藝術的想像の根柢には尙暗い或物がある。非概念的であるだけ非自我的であり、單に客觀的であると云ひ得る。此點に於てその對象は未だ全然自然の性質を脫し得

ない。唯道德的意志の立場に於てのみ、我に對するものゝ根柢に明なる人格を認むると共に、自己自身が眞に人格的となる、眞の人格的内容が之によつて顯現せられるのである。道德的意志に於てのみ我々は實在全體の根柢に達するといふことができる。徹底せる道德的自我に於ては自然の根柢にも明なる人格を認めねばならぬ。藝術的立場に於て潛在的であつたものが道德的立場に於て顯現的となる、卽ち概念的に明となるのである。私は藝術は道德を豫想して成立すると思ふ、道德的發展を豫想して藝術的想像があると考へるのである。總ての根柢は唯、一生命あるのみである、一つの自由我があるだけである。眞摯なる生命の要求の上に立たない藝術は單なる遊戲でなければ、技巧に過ぎない。而して眞摯なる生命の要求を離れて何處に道德といふべきものがあるであらう。意識内容の本質が矛盾の統一にあるとすれば、藝術的内容も道德的内容もいづれも矛盾の統一であつて、藝術的内容が意識的となるといふのは意識内容が己自身の根元に還るのであるといふことができる、人格的統一が自己自身の目的に進むと考へることができる、我々は自然の根柢に人格的内容を見れば見る程、道德的となると考へねばならぬ。藝術の立場は超概念的と考へられるが、道德の立場に於ては概念的立場が内面的に取り入れられるのである。

道德的立場にいたつて自由我が眞に自己自身の立場に達し、生命の眞意義が顯現的となるのである。所謂勸善懲惡を以て藝術の手段と考へるごときは固より幼稚なる藝術觀にすぎないが藝術を反道德的と考へるのも眞に深く藝術を解するものではない、藝術に於て肉の歎美、惡の同情の底にも全人格の光がなければならぬ。肉慾や罪惡の單なる描寫は何等の藝術的價値を有するものではない。人生といふ大きな曲線の孤線として大なる人生の一片として描かれる所に、此等のものゝ藝術的價値が存するのである。個性摸寫が藝術に於て重せられるのも之に由るのである、全人格の一孤線として見られることによつて個性の價値が生じ來るのである。藝術的對象としての善も惡も人生の曲線に於ける erzeugender Punkt の如き意味を有たねばならぬ。單なる肉慾や罪惡は藝術的內容としては極めて貧弱にして抽象的なるを免れない。藝術の內容は此等のものゝ底に輝ける靈の生命にあるのである。他方に於て、道德的生活といふも單に槪念的法則に從ふことではない。星の輝ける大空にも比ぶべき道德的良心は我內心の奥に潛める無限なる生命の發露でなければならぬ。何等の生命なき因襲的法則を固執するのは單なる肉慾が藝術的價値を有せざるの如く何等の道德的價値をも有ち得ない。道德的生命の內容は我々の肉體

的生命の根元にして而もその目的たる肉の背後に潜める精神的内容でなければならぬ、無限なる藝術的内容即ち人格的潜勢力の衝突によつて生ずる内容それ自身の自覚でなければならぬ、即ち全人格の發露でなければならぬ、人間性全體の發展完成でなければならぬ。此の如き完全なる人間性の發露を傷くる道德法は道德法ではなくして、却つて罪惡である。唯一つの生命が藝術を創造すると共に、道德的社會をも構成するのである。我々の生命は無數なる曲線の集合である。かゝる曲線の集合が我々の道德的生命を構成するのである。而して理性といふのはかゝる集合の中心であるとすれば、道德的生命に於て理性が内在的とならねばならぬ理由を解し得るであらう。又斯く理性が内在的となるといふことは道德的行爲の意識的なることを意味するであらう。無意識といふのは部分が全體に對する反抗である、未だ十分に矛盾の統一に達せざる部分的獨立である。矛盾の統一に於て全體が積極的内容を得れば、すべて意識的となるのである。

藝術的創造作用に於ては、人格内容が理性によつて構成せられた認識對象界を通らないで、直に實在として直覺の世界に現れる、即ち思惟の範疇の構成を通らないで經驗的事實の世界に表現せられるのである。フィードレルの云ふ如く我々の純粹視

覺の發展は自ら表現運動を伴ひ來つて藝術的創造作用となるのである。かくしてその現れたるものは、我々の心理的自我に對しては自然其物の如く動かすべからざる客觀性を有つのである、知識よりも深い行爲の統一の上に立つものとして知識に對して不可知的の意義を有するのである。此點に於て本能作用と同樣の趣を有するのであるが、一層深く考へれば、我々の見るとか聞くとかいふ如き知覺作用も、それ自身に動的なる人格的作用の發現である、廣義に於ける意志の實現である。藝術的創造作用は概念的對象界を通らないと云つても、物力や本能の如きものとは同一ではない、既に自由我の作用である、恰も「知覺の豫料」に當はまつた感覺內容の如く、自由我の對象界に屬するのである。此點に於て既に理性的と云つてよい。所謂感覺が「知覺の豫料」の原理に當箝つて客觀性を得る如く、所謂實在界は「行爲の豫料」ともいふべき感情移入に當箝つて文化現象となる、卽ち自由性を得るのである。感覺が强度を得る如く、實在は感情移入によつて自由性を得るのである。「知覺の豫料」に當嵌つて成立つた「實在的なもの」の結合によつて所謂客觀的實在界が成立する如く、「人格的なもの」ゝ結合によつて文化社會が成立するのである。我々の經驗界が意志の對象界として力の場面と考へられ、力と力との不變的關係が自然の法則となる如く、人格

的實在と人格的實在との關係が道德法を生ずるのである。經驗界に於て實在なるもの」が認められた時、その中に無限の物理的法則を豫想せられる如く、人格的實在が認められる時、その中に無限の道德法が含まれるのである。道德法は人格的內容の發展の法則に過ぎない。此法則が文化の社會を構成するのである。全人格の統一の立場、卽ち人格の超限數的立場が道德を藝術から區別するのである。社會は人格が相互に關係する場であつて、人格の純なる內容は社會に於てのみ自己自身を顯現すると考へることができる。斯く道德的立場は全人格の創造的立場なるが故に、道德的行爲は藝術的作用と異なつて實在的と考へられる。道德的行爲は自然の法則に從ふの故に實在的なるのではなく、自然の法則を自己の中に含むが故に實在的なるのである。意識一般は意志一般の一面に過ぎない、知識我の奥に實踐我がある、道德的世界は自然界の根元である。藝術的創造作用に於ても無論我々は知識の世界を超越し、理性を人格的作用として內に含むのではあるが、單に作用として之を含むのであつて、未だその全內容を含むことはできない、從つて作用其物が直に事實となることはできない、是故に非實在的と考へられるのである。道德的行爲が存在を目的とする樣に思はれるが、道德的行爲の目的は自然界の出來事にあるのではなくし

て、それ自身の中にあるのである。外界の實在性は却つて我々が深い內面的當爲を認めることによつて成立するのである。我々が全人格の奥底に至る時、卽ち內面的當爲の極致に達する時、我々は理性の上に立ち、所謂客觀界がその中に含まれねばならぬのである。意識一般は全人格の無限なる統一の方面なるが故に、全人格の立場に立つ時、意識一般の對象界を含まねばならぬのである。全人格の立場に純ならんとする時、此立場に於て十全とならねばならぬ、何等の暗影を殘してはならぬ、全體が一つの人格的活動とならねばならぬ。藝術に於て人格的立場の上に立つのであるが、尙此點に於て不純なることを免れない、全然動的となることはできぬ、靜力的狀態に於てあるのである。

社會は人格と人格との結合である。見方によつては我々の個人的意識體系が一つの社會と見ることができるであらう。一瞬々々の作用が自由であり、此の如き自由作用の結合が一個人の意識である。此意味に於て社會的意識の根柢にも一つの個人的統一を認め得るであらう。無論、社會が人格と人格との結合であるといふことは異論のあることであらう。原始的社會は非人格的であるとも言ひ得るであらう。併し子供には未だ人格的自覺はないかも知らぬが、人格的自覺が個人的意識の

本質を成す樣に人格と人格との結合統一が社會の本質を成すのである。社會の本質が人格と人格との結合にあるとすれば、社會は道德的アプリオリの上に立つものといふことができるであらう。das Reale として認識對象界に入り來る感覺は「知覺豫料」の原理によつて成立するものとして我々はその背後に所謂物理學的世界を構成する如く、個々の欲求は既に道德的アプリオリの上に立つものとして、我々はその背後に文化的世界を構成するのである。社會の構成は自然界の構成の如く統一的理性の獨立である、理性自身の對象界が獨立となるのである、卽ち感覺的實在から概念的實在に移るのである。特殊としての現實は單に所謂經驗界へのインデックスではなくして、無限なる世界へのインデックスである、すべての世界が此處から出立するのである。所謂經驗界成立の根柢に作用と作用と直接の結合があり、「知覺の豫料」の原理は此統一を示すものであるが、作用の作用が自己自身の積極的立場に立つ時、人格的內容の世界、文化の世界が構成せられるのである。色覺が知覺の豫料の原理に當嵌つて客觀性を得るといふのは純粹視覺の作用が人格の一作用として自覺せられるのであるが、全人格は未だ自己自身の眞の統一に達して居ない、部分が尙獨立の狀態に於て居る。此故に經驗內容の背後に獨立の力を認めねばならず、我々の前に

は無限に暗い自然がある。我々が作用の作用の立場に徹底する時はじめて暗い自然の影は消え失せて自己の力となり、作用と作用と直接に結合し、人格と人格と相對する社會となる。タルドの様に物理現象の底にも faits sociales があると云ひ得るであらう。社會は人格的作用が顯現的に働く力の場である。精神作用はいづれも純粹活動として、無限のポテンシャルを含む如く、此等の作用の統一たる人格的活動の背後には人格の無限なるポテンシャルを含むと考へることができる。かゝるポテンシャルが藝術的内容となる。藝術的内容は社會に對して與へられた課題である。單なる作用の内容が全人格的統一作用の一面たる理性によつて統一せられて所謂自然界となり、此世界を材料として之を統一する人格的内容の世界が藝術的世界となる。道德的世界は又此の如き人格的内容の世界を全人格の立場から統一したものである。ベルグソンの云ふ如く我々が生れながらに有する人格のポテンシャルは無限に豐富なるものであるが、實現に當つては我々はその多くを棄てなければならぬ。斯くその大部分を棄てなければならぬといふのは、物質界即ち同時存在の場面に衝突する故である。同時存在の場面といふのは意識一般の對象界である。藝術的作用に於ては、我々は此場面を破つて内面的生命の世界を創造する、生命その儘の世界を創

造する、併し人格其物の中に又同時存在の關係が成立する、我々は個人の意識内に於て自己の過去を想起する時に入込む關係と同樣である。自己の人格の深い奥底に達しやうとするには、益々此方向に進まねばならぬ。美の要素として一面に不調和がなければならぬのは之に由るのである。その發展せるものが崇高となる。美は此不調和によつて眞の美となるのである。ロッチェは我々の感情はすべてが調和的美を求めるではなく、崇美を伴ふことを要求する、誘惑的な Einklang の側に die stühlende Dissonanz を伴ふことを求める、斯くして知識に於て表はす如き世界の本質を藝術的感情の中に表はし得ると云つて居る (Lotze, Geschichte der Aesthetik. s. 329)。作用の作用の立場に於ての無限の進行の要求は理性的感情が之を表はすと考へることができるのである。カントが云つた如く此感情が崇高であり、崇高は眞理其物の如く嚴肅である。私は是に於てロッチェの崇高に關する深い洞察を引用せざるを得ない。

Suche ich zusammenfassen, so scheint die allgemeine Bedingung aller erhabenen Wirkung darin zu liegen, dass irgend eine Erscheinung irgendwie uns ein Letztes, über das hinaus kein Fortschritt des Denkens und kein Rückgang des Geschehens möglich ist, nicht als einen Gedanken, mit dem sich hypothetisch spielen lässt, nicht als eine überweltliche Möglichkeit, sondern in dem ganzen Ernst einer wirklich

den Augenblick füllenden wirksamen Gegenwart, zur Anerkennung bringt. (op. cit. s. 331.)。此の如き我々の達することのできない最後のもの Letzes は無限なる人格的發展の積極的統一によつて成立するのである。カントの云ふごとく、美の價値判斷の根柢には理解力の概念があるが、崇高の價値判斷の根柢には理念がなければならぬ。理性的感情とは此の如き理念の働きである。而して私は Th. Vischer と共に崇高は美と異なる一範疇ではなくして、美の一方面であると考へざるを得ない。崇高は美の動的方面である。カントが美の基に理解力の概念を考へたのは主知主義の因襲に捉はれたのではなからうか。如何なる美的價値の根柢にも理解力の統一以上のものを認めねばならぬ。ロッチェの如く單に mathematisch-Erhaben といふべきものなく、すべてが Dynamisch-Erhaben であると云ひ得るのみならず、すべての美も Dynamisch-Erhaben の要素を具して居ると思ふ。美の奥には動くものがなければならぬ、深い美の底には、悲哀か、さなくばユーモアがある、卽ち人格的內容の動的方面がなければならぬ、理念の力がなければならぬ、美と崇高との間には恰も分離數と連續數との如き關係がある。此の如き全人格の統一の働きは始からすべての美の根柢に働きつゝある。人格の無限なる進行が現れて崇高となり、更に全體の立場に於て理性獨自の世界を構

成するのが道德的行爲である。道德的社會は此の如くにして成立する藝術品である。藝術的內容を成したものが顯現的に現れ來るのである、理性其物の實在界が成立するのである。藝術的內容は此立場を豫想して成立つ道德的作用のポテンシャルと云ふことができる。

四

藝術の內容と道德の內容とが、共に作用と作用との直接の結合の內容ともいふべき人格的內容であつて、前者は後者の可能的狀態であると云ふ考に就いては、尙多くの議論を要することであらう。藝術の內容は非概念的、非實在的と考へられ、且つすべての藝術は各自に固有なる經驗內容と離すべからざる關係を有つて居ると考へられる。繪畫には音樂によつて表はすことのできない繪畫の美があり、音樂には繪畫によつて表はすことのできない音樂の美があるのである。否、美の內容などいふことが既に藝術家の嫌ふ所であるかも知らない。併し崇高といふことは我々が無限なる實在に對する感情である。時間それ自身の無限性、空間それ自身の無限性、力それ自身の無限性が我々の主觀から獨立せる理念的實在を構成し、此の如き實在に對して我々は崇高の念を生ずるのである。卽ち所謂實在界なるものゝ根柢に流れ

る絶大なる宇宙の生命が我々を內から動かすのが崇高の感である。此故に崇高の感は眞理の感の如く又道德の感の如く嚴肅である。我々は概念的なるものゝ生命を知ることによつて、卽ち思惟の對象を直觀することによつて、崇高の感を生ずるのである。崇高の感の基には知的直觀がなければならぬ。創造作用の無限性が崇高の感の據つて起る源であつて、所謂實在界の客觀性も實は之に基くのである。それ自身に於て創造的なるものゝみ、我々に對して嚴肅なる客觀性を有することができるのである。而して此の如き創造作用に對する感情が我々の美の本質である。美の內容は概念的實在でないといふことは云ふまでもないが、之を幻覺や錯覺と同一視するのは誤である。美の內容は超知識的ではあるが反知識的ではない、寧ろ包知識的と云ひ得るであらう。判斷の內容として與へられるものも先づ此の如き直覺として與へられるのである。

藝術的に敏感なるゲーテが色ガラスによつて試めした種々の色の感情卽ち氏の所謂 sinnlich-sittliche Wirkung は今も尙クラシカルと考へられて居る。薄暗い冬の景色を黃のガラスを通じて見た時、Das Auge wird erfreut, das Herz ausgedehnt, das Gemüt erheitert" と云ひ、之に反し青いガラスは物を trauriges Licht に於て表はすと云つて居

る。我々は之と同様の感情的印象を音の方に於ても感ずることができる。高い音は erheiternd und erregend であつて、低い音は verstimmend oder Ernst und Sehnsucht erzeugend と感せられる。併し斯く種々の感覚に伴ふ感情の内容が、すべて共通で、同一であるとするならば藝術的内容と感覚的材料との不可分離の關係があると考へ得ないであらう。音樂によつて表し得る感情内容は繪畫によつても表し得る譯である、而して此の如きことは必ずしも不可能でもなからう。併し尚一層深く考へて見れば、嘗てレッシングが繪畫と彫刻との間に於て論じた如く、各藝術は他によつて表はすことのできない美的内容を有つと考へることができる。ペーターは Each art having its own peculiar and untranslatable sensuous charm, has its own special mode of reaching the imagination, its own special responsibilities to its material と云つて居る。此の如き考から云へば、同様の感情的内容を種々の藝術によつて表はし得るといふのは、知識の立場から感情内容を感覚から離して考へるによると云ふこともできる。藝術の立場に於ひては、これ以上の意味に於て兩者の間に離すべからざる關係があると考へねばならぬ。感情の内容と感覚的材料との關係についても種々に考へ得るであらう。或感覚が特に或感情の表現に適し或感覚は之に適せないと考へ得る場合もあるであらう。併

し此の如き關係は尙外面的に過ぎない。象徵的藝術の弱點は此にあるのである。眞に感情と感覺と不可分離であるといふには、感情は感覺の內面的精神と解せられねばならぬ。種々なる藝術は感覺的精神の內面的發展と解せられねばならぬ。斯くして耳の藝術は眼の藝術によつて表すことのできない藝術的特色を有つことができる。感覺的經驗の精神とは感覺內容の自發自展性卽ち感覺的經驗の底に含まれたる無限の連續性を意味するのである。此の如き作用の人格的價値卽ち作用の立場に於ける內容が藝術的內容となるのである。各感覺が藝術的內容として有する意味卽ち藝術的質量ともいふべきものは、唯物體の質量の如く單なる量ではなくして嚴密なる意味に於ける內包量である卽ち强度である、我を唆す量である。所謂感覺の强度と名づけられるものはすべて此種の量である。此量は一方に於て「知覺の豫料」の原理の基として自然界の要素となると共に、一方に自我を唆す强度として藝術界の要素ともなる。右の如く考へることによつて各藝術は他によつて表すことのできない獨自性を有するのである。

道德的行爲とは如何なるものであるか、道德的行爲とは單なる外界の權威に從ふことでもなく、又單なる理性の命令に從ふことでもない。論理的矛盾律は我々の意

志に對して categorical imperative を與へることはできぬ。道德的命令の基には我々の生命の要求がなければならぬ。唯我々の生命の要求が生命自身の立場に於て矛盾する時、それが惡と考へられるのである。他人を人格として敬することによつて、自己が自由なる人格となることができる。自然に對しても、之を人格化することによつて自己を人格化することができる。藝術に於ては尙感覺的經驗の背後に潛んで居た人格的內容が道德的行爲に於て自己自身を顯現し來るのである。後者に於て人格的統一が眞に自己の獨立自由の域に至るといふことができる。故に藝術的內容が所謂知覺の世界に於て表現を求める如く、道德的內容はその表現を認識對象の世界卽ち所謂實在界を求めると考へねばならぬ。藝術は知覺の世界の精神を表し道德は實在界の精神を表するのである。道德的行爲は存在を目的とすると云ふが、存在の爲に存在を目的とするのではない、實世界は道德的行爲の表現なるが故である。色や形の經驗の背後に潛める人格的內容が繪畫や彫刻によつて表現せられ音の經驗の背後に潛める人格的內容が音樂によつて表現せられる如く、無限なる作用の統一たる理性の根柢たる自由我の內容卽ち純なる人格的內容其物は道德的社會として實在界に表現せられるのである。道德的社會は理性の藝術的作品である。

フィードレルの云ふ如く我々の精神作用がすべて表現的動作に發するものとするならば、道德的行爲は理情の表現作用であつて、我々の道德的社會は理性の藝術品に比すべきものであらう。藝術的創造作用と道德行爲との相違は前者は直覺的であり、感情的であり、從つて無意識であり、後者は之に反し概念的であり、意識的であると考へられて居るが、藝術的創造作用は道德的行爲と共に人格的內容の創造作用即ち自由我の働きであつて、藝術的內容と道德的內容とは同一性質である。唯前者は抽象的であり部分的であり、後者は具體的であり統一的である。無意識的とか非概念的とかいふのはその抽象的であり部分的であることを意味するのである。

フィードレルの如く我々が視覺作用に純一となる時、自ら伴ひ來たる表現運動が藝術家の創造作用であるとするならば、藝術的作品は未だ意識一般の立場に入り來らない、即ち未だ反省せられない作用の具體的內容の表現であつて、我々の純なる生命の表現と考へることができるであらう。併し我々の自我は單なる視覺作用や聽覺作用ではなくして、無限なる作用の作用である。客觀的實在界が種々なる經驗內容の統一と考へられる如く、我々の全人格內容は無限なる作用の精神即ち無限なる感情的內容の綜合でなければならぬ。繪畫には繪畫によつてのみ表はし得べき精神

があり、音樂には音樂によつてのみ表はし得べき精神があるとするならば、我々の全人格はすべて此等の精神の綜合統一でなければならぬ。此の如き全人格の綜合的統一の創造作用が道德的行爲であつて、我々の社會的現象はその表現である。藝術的內容が知覺や表象の世界に表現せられる如く、道德的內容は全人格の統一作用即ち理性の對象界たる實在界に於て表現せられるのである。道德的內容は全人格の統一的內容即ち文化史的內容なるが故に、藝術的內容は意識一般の對象界に入り來る事によつて、即ち反省せられることによつて其超概念的性質を失ふのであるが、道德的內容は之に反し反省せられることによつて其性質を失はないのみならず、反省的思惟の對象界をその表現の場となすのである。知識の對象界は道德的意志の內容の一面として成立するのである。ベルグソンの云ふ如く、我々が運動の場面と衝突することによつて、生れながらに有する豐富なる人格の大部分を棄てねばならぬかも知れない、實在界の關所を通り得るものは我々の人格的內容の一小部分であるかも知れない。併しそこには virtual と actual との區別がある、夢と實在との區別がある。量的には小と云ひ得るかも知らぬが、そこに次位の相違があると考へねばなるまい。立體は如何に小なるも高次的の故に無限の平面よりも豐富と考へること

もできる。我々が熟慮して行爲に移る時、種々なる想像や欲望は先づ全人格の内面的統一の立場に於て限定せられ、又外界との關係に於て限定せられる。一方から見れば、我々の人格の内容が限定せられると考へられるであらう。併し斯くして限定せられた内容は無限定なる全内容よりも一層高次的の意味内容を有するのである。virtual なるものゝ唯一つが actual となるのかも知らぬが、後者は無限に前者を創造し得る力である、創造的自我の對象界に屬するのである。道德的行爲といふのは右の如き意味に於ての無限なる人格的内容の統一である。無論藝術的作用といへども單なる想像ではない、表現作用によつて限定せられねばならぬ。而して此の如き行爲の限定其物が藝術的内容をして單なる想像の上に、人生に於ける深い意義と客觀性とを有せしめるのである。道德的行爲はかゝる作用の純なるものである。生物的生命慾のため人格の内容を棄てるならば、之によつて我々の人格が貧弱となると考へ得るであらう。併し道德的行爲に於ては、之を棄てるは、之を消化するのである、生長するのである。

道德的社會を理性の表現と見做しこれを藝術的作品に比することは多くの反對を免れ得ないであらう。併し藝術的の内容は客觀的自然の形を以て現れるとして

も、その本質は客觀的自然にあるのではない。藝術的作品は我々の內面的生命の發露である、我々の人格の創造である。ベルグソンの言の如く眼は視覺作用のカナルであり、我々の知覺の世界は單に眼のみによつて刻ざまれたる實在であるとすれば、藝術的作品は我々の眼といふ如きカナルの中に盛り切れない大きな生命の流によつて穿たれた實在と考へ得るであらう、私の嘗て云つた如く手を加へた眼によつて見られた實在とも云ひ得るであらう。此場合、手の運動感覺が內面的創造の精神を現はして居るのである。我々の文化現象の社會も藝術的作品と同じく創造的人格の所作である。深い大きな人生の發露である。種々の國民の言語、風俗、習慣、制度、法律から神話傳說等、すべて此精神の表現たらざるものはない。而して此場合、藝術的表現作用の場合に於ける手の運動の位置を取るものは理性の作用である。純粹視覺の背後に潛める精神が手の內面的運動を通じて藝術品を創造する如く、種々なる經驗の背後に潛める種々の精神は、いづれも理性の創造作用と結合することによつて、文化現象を構成するのである。藝術品其物も理性の表現作用と結合することによつて、文化現象と化するのである。藝術的價値が文化價値としてその價値を有すると考へられるのは之れによるのである。人格價値を離れて藝術價値はあり得な

い。その他は技巧に過ぎないのである。一方に於て道德的行爲は亦理性自身が自己の對象界を構成すると云ふの外に意味はない、文化財 Kulturgüter の創造作用に過ぎない。抽象的な形式的道德は眞の道德ではない。藝術的作品は自然現象の如く客觀的、具體的と考へられ、文化現象は之に反し主觀的、人爲的と考へられるが、我々の文化現象の所與としては衝動がある。感覺と結合することによつて自然現象がその實在性を得る如く、衝動と結合することによつて文化現象はその實在性を得るのである。文化現象の實在性は自然現象のそれに劣らない、歷史は自然と同一の實在性を有するのである。唯藝術に於て生命は靜的狀態に於てあり、道德的行爲に於ては動的狀態に於てあるのである。前に於ては價値が完成せられたかの如くに見え後者に於ては價値は完成の過程に於てあるのである。言語、風俗、習慣等所謂社會意識の現象なるものはいづれも自然と同じき客觀性を具するのであるが、その客觀性は不完全たるを免れない、此故に單に符號又は手段と見做されるのである。大なる精神の表現としては十分でない。大なる精神の全體が此等のものに於て自己自身を映することはできぬ。社會はかういふ意味に於て大なる精神の不完全なる身體と見ることができる。

以上述べた如き考は l'art pour l'art を主張する人々の考から見て、不純なる藝術觀とも考へられるであらう。併し私は藝術が道德に從屬し、勸善懲惡的でなければならぬなど考へるのではない。純なる藝術的內容は純なる人間性である。道德も此人間性を離れて別に存するのではない。唯藝術は全人格の統一ではない。而して人間の手は人間の手として意味を有し、人間の足は人間の足として意味を有する如く、部分的人間性は全人格の統一から見て、はじめてそれ〴〵の意義と生命とを有するものと考へるのである。此の如き考は技巧を輕視し各藝術の特色を無視するかの樣に思はれるかも知らぬが、技巧の爲の技巧は單なる遊戲の外、何等の價値をも有たぬ。眞の技巧は內容が客觀的に生きるといふことである。藝術家がその表現に於て拙であると云ふことは、藝術的內容の理解の不充分なることを意味して居らねばならぬ、眞の生命の內容を理解して居らぬといふことができる。色や形の世界の生命は唯全身眼となることによつて理解せられ、音の世界の生命は唯全身耳となることによつてのみ理解せられるのである。私はトルストイの如き反文化的藝術觀に同意したくない。人生の眞意義を離れた技巧は排すべきであるとするも、單に自然のまゝの人生が眞の人生ではない。眞の人生は內面的生命の無限なる發展でな

ければならぬ。

五

以上論じた所は頗る不完全にして且議論の緊縮を缺いで居るから、私は終りに尙多少の考を附加して置きたいと思ふ。意志の內容も感情の內容も共に私の所謂作用の內容であつて、共に人格的內容である、或は之を自由我の內容と云ひ得るであらう。知的作用も固より意識作用であるが、その內容は客觀的であつて、之を人格的內容と云ふことはできぬ。我々は物を知るといふ意味に於て知的作用を知ることはできぬ。我々は音を聞くが、聞くことを聞くことはできぬ。我々が自己の精神作用を反省して見て、自分が見るとか聞くとか云ひ得るには、何等か作用の統一の內容がなければならぬ。此統一の積極的內容が明でない時、我々は之を生理的原因に求める。例へば對照によつて色の變つて見える場合、それだけでは異つた色と判斷することもできるが、他の場合の判斷との矛盾から、我々は之を主觀的判斷と見做し、その變化の原因を生理的に求めるのである。かゝる場合に於ては作用といふものは全く生理的となるのであるが、かゝる變化の原因を聯想に求め得たとすれば、我々は之

を心理的原因から説明し得たといふことゝなり、意識的統一即ち自我を認め得たことゝなる。併しかゝる場合に於ての自我の内容といふのは單に「意識せられた」といふことに過ぎぬ、表象は恰も原子の如く量的に働くのである、自我は無内容と云つてよい。併し實際我々の精神現象は爾機械的に働くものではない。如何なる心理學者も我々の聯想が感情によつて支配せられることを認めないものはない。但、普通の心理學に於てその原因を意識の素質に求め、更に之を我々の有機體の構造に歸し、尚進んでその源を生物發展の歴史に求めるのであらう。斯くして再び自我は無内容となり單なる名目とならざるを得ない。勿論、翻つて見れば、生物の構造や發展の上に合目的統一を認めるのには、先づ我に目的概念がなければならぬ。然らざれば如何に巧妙なる有機的構造も物質の偶然的結合と異なる所はない。否機械力といふ如き考すら意志の内面的經驗なくして成立ち得ないであらう。併し今此議論に入込むことを避けて、兎に角右の如き考を取るならば、意識現象といふ如き實在はなくなるであらう。意志は幻覺となり、感情も一種の感覺となる。意識現象は意識現象として何等の特殊なる法則を有せず、唯その性質として單に意識といふことだけとなる。而して單に意識といふことは特に意識現象なるものを認める理由となる

ことはできぬ。物理現象といへども、元來意識現象即ち直接の經驗より出立するのである、唯その說明の立脚地によつて物理現象となるのである。先づ我々に意識せられるといふことがあつて、それから我々はその說明を求めて行くのである。勿論或意識現象の變化が今日の生理的に說明のできない時、我々はその背後に自然現象と異なつた精神作用といふ如きものを認め得るであらう。例へば、我動作に對して注意といふ如きものが加つた場合と、加はらない場合とその結果が異なるならば、我々は之を注意といふ精神作用に歸せざるを得まい、即ち表象其物の力に歸せねばならぬであらう。併しこれもその生理的原因が明となれば又精神作用といふ如きものはなくなる。少なくとも、此る場合に於ては、精神作用といはれるものは現實の我を離れて認識對象界に射影せられたものである、此點に於て物力と同樣である。

我々は所謂經驗內容即ち知的內容の矛盾の統一を、右の如く之を外に求めないで、直接に之を內に求め得た時、知的內容と異なつた意識內容が成立するのである。それが眞の自我の內容であつて、嚴密なる意味に於て意識現象といふのは此外にないとも云ひ得るであらう。我々の意識が青の知覺から赤の知覺に變じたとする。單に之だけならば、我々は之を客觀的に物の變化と見得るであらう。色の知覺が音の

知覺に變じた如き場合、物理學には物が變つたと考へ得ないであらうが、直接の意識の變化としては爾考へることもできる。而して物理的矛盾を脫するには生理現象を考へればよい、卽ち視覺中樞の次に聽覺中樞が働いたと考へればよいのである。かゝる場合、意識の統一があるとしても、何等の內容をも有たぬ。併し私が花を見てから音樂を聞かうと思ふたといふ樣な所謂意志の意識が加つて來れば云ふまでもなく、さなくとも赤と青と異なるとか、色と音と異なるとか云ふ如き所謂判斷作用が加つて來るとすれば、我々の視點は前と大に異なつて來る。我々の眼は外から內に向けられることゝなる。判斷作用といふのは見るとか聞くとかいふことに對して、作用の作用として獨立の內容を有つて居るのである。無論判斷と迄行なくとも、記憶といふものが伴ふ時、我々は既に反省の立場に入るといふことができるであらう。ライプニッツも記憶を以て monades nues と âmes とを區別する一つの特徵として居る。生理的には同一の腦細胞が刺戟せられるといふことであるかも知れぬが、意識的には自己同一が基礎となると考へることができる。種々なる聯想はこの直接なる內面的自己同一の上に働くと考へることができる。是に於て始めて獨立の意識內容が成立ち、而してそれが所謂 Bekanntheitsgefühl となるのである。次に如何なる意味に

於て思惟が意識現象となるか、思惟作用についてどれだけ意識内容と考へることができるか。判斷は合目的的作用である、目的の實現といふことが判斷の本質である。而してその目的内容は因果關係を超越して、それ自身の内面的法則を有し、その法則から直に働くとすれば、思惟は作用の作用として、それ自身に獨立の意識内容を有すると考へることができる。斯くして判斷の内容は主觀的と考へられるのであるが、今日の認識論者の主張する如く、判斷の對象は主觀的ではなくして客觀的である、超個人的である。此點に於て判斷の對象は未だ人格的内容といふことはできぬ。知識の内容は再び客觀的となり、唯誤謬といふものが、主觀的原因に基くものとなる。而して意識作用の内容として意識狀態といふ外、何等の積極的内容がないものとすれば、前に云つた如く再び之を生理的原因か聯想の結果に求めるの外ないであらう。ヴントの云ふ如く統覺に於ては目的表象が始から明に意識せられて居ると云つて見ても、その全體の方向即ち意味といふ樣なものが客觀的眞理といふ如きものならば、矢張り純粹な意識現象として何等の積極的内容をも與へることはできぬ。或はマイノングの假定の對象のごときものが意識内容と考へられるかも知らぬが、氏の所謂オブエクチーフといふ如きものも直に意識内容ではない。オブエク・チーフの

中には非眞理的又は非實在的内容をも含み得るのであるが、オブエクチーフは尚作用の内容であつて作用の作用の内容ではない。

以上の如く考へれば、嚴密なる意味に於て意識内容と云ひ得るものは情意の内容に過ぎないと云はねばならぬであらう。併しマイノングのオブエクチーフの如きものまで、すべて客觀的對象界に入れてしまへば、主觀的意識内容としては何物が殘るであらうか。ボルツァーノの Satz an sich とかマイノングの Objectiv とかいふ如きものが超越的價値に關して、卽ち之に規範的立場が加はつて判斷作用といふ如き合目的的作用が成立するとするならば、かういふ判斷作用自身が自己の意識として如何なる内容を有し得るか。我々は聽く事を聽く事はできぬ、判斷作用を判斷の對象とすることはできぬ。斯く云つてしまへば精神作用などいふものは全く無くならねばならぬ。併し苟も我々が作用を意識すると云ひ得るならば、そこに何等かの内容がなければならぬ。普通には之を反省によつて知られるものとして、矢張一種の知的内容と考へるのであるが、反省といふことが所謂判斷と同意義のものとするならば、我々は判斷が判斷を知るといふ自家撞着に陷らねばならぬ。是に於て我々は相反する意識の兩傾向なるものを認めざるを得ない。我々が普通に反省といふのは

矢張自己を對象化して見るのである。此點に於て外界に生命の如き目的的統一を考へると同樣である。かういふ意味に於ては眞の自我を知ることはできぬ。眞の自我の直接の意識或は體驗は此の如き意味の反省と異なつたものでなければならぬ。我々は此の如き判斷の前の意識といふものを認めねばならぬ。判斷の意識否判斷其物も實に此意識の上に成立するのである。メーン・ド・ビランは l'habitude の結果が二種あるとして居る。所謂感覺 impressions passives は習慣によつて不明瞭となる、例へば香の如き慣るに從つて感じなくなる。之に反し能働的感覺 impressions actives 例へば有意的運動の如きものは繰返しと習慣とによつて益明瞭となる。les données du tact actif の如き手の有意的運動に導かれて物の種々なる形狀及び性質を捕へ、且つ分析することができる。我々の知的といふのは此の方向への發展である。判斷の本にも努力 l'effort がある。而して有意的努力には自我の意識 conscience du moi が結合して居る。この自我は自己を否定することなくして自己を對象化することはできぬと云つて居る。我々は此の如き意味に於て作用の直接の意識を有するのである。私は右の如き l'effort moteur volontaire の意識があつて始めて作用の意識といふものが成立すると思ふ。我々は聽くことを聽くことはできぬ。視ることを視るこ

ゐはできぬ。併し純なる作用と作用との結合の立場に於て、此等をメーン・ド・ビランの所謂能働的感覚として知ることができる。目的點の統一に於て之を知ることができるのである。聽く事と視る事と如何に異なるか。色と音とは非常に異なつたものに相違ない。併しそれは色と音との相違であつて、聽く事と視る事との相違ではない。聽くことゝ視ることゝを區別する積極的内容は自我の無限なる色合でなければならぬ。色に伴ふ微妙の繪畫的感情、音に伴ふ纖細なる音樂的情緒といふ如きものが、作用としての視覺や聽覺の積極的内容であると思ふ。右の如く云へば或は知的作用も意識ではないかと云ふ疑が起るであらう。併し表象自體とか命題自體といふ如きものも客觀的として考へれば、知的作用の内容としては單に意識せられるといふことだけとなる。其他は單一とか複合とか、目的表象が先立つとか後に來るとかいふ如きことに過ぎない。知的作用といふのは恰も客觀界から主觀界に入るの關門と考へることができる、一般から特殊に向ふ門口と考へることができる。此以上の純意識の積極的内容は情意の内容となるであらう。

以上の如く考へ得るならば、嚴密なる意味に於て意識現象といふのは情意の内容であつて、知的内容が經驗内容の一般的關係即ち客觀的内容を示すものとすれば、

意的內容といふのは之に反し特殊的內容を示すものと考へ得るであらう。是故に意的內容、情意的內容は矛盾の統一、非合理的なるものゝ合理化と云ふことができる。而して此の如き特殊的中心へ結合、經驗內容の特殊化、卽ち個性的統一は行爲的統一でなければならぬ、行爲に於て我々は一般的なる物を特殊なるものゝ中に包攝するのである。ドゥ・ビランの所謂對象化することのできない自我の統一は表現的統一とも云ひ得るであらう。始めに於ての統一、與へられた統一ではなくして、行先に於ての統一、終に於ての統一である。感情移入による表現的理解は知的理解よりも深くして根本的である。知的理解もかゝる理解の上に立つのである。特殊的統一は內面的連續の統一である、無限なる人生の曲線の一孤線としての統一である。此種の理解は繰返さるればさるゝ程、明となるのである。我々の現實は實に此の如き曲線の一點である。普通には一般の中に特殊を包攝すると考へて居るが、眞に特殊なるものは一般的なるものを自己の中に含むものでなければならぬ。一般的なるものは却つて特殊的なるものゝ中の內面的傾向でなければならぬ。例へば曲線的座標に於て、曲線の內面的傾向によつて曲線自身が表される如く生產點と生產點との關係によつて生產點自身が表されるのである。

情意の内容が右に述べたごときものとするならば、感情と意志との相違は後者はかゝる特殊化的方向に於て最終の統一と考へることができるであらう、特殊化的進行の極致と考へることができるであらう。ライプニッツが神は無限の可能的世界の中から最善の世界を創造したと云ふ如く、一般的意志の統一の上に於て、卽ち最高意志の統一の上に於てのみ、我々は最終の特殊化に達し得るである。特殊の中に無限なる一般を含む現實的意識の根柢に於て、我々はいつも創造的進化の大曲線に接して居るのである。此の如き大曲線の尖端に於て限定せられたものが意志の內容となるのである。此故に意志は、すべての一般の統一たる意識一般の立場を含む、卽ち認識對象界を含むことゝなるのである。意志は現實的である。此の如き極限の立場は單なる可能的內容の總和ではない。そこに立場の飛躍がなければならぬ。人生に意義のない美はないが、美は直に善といふことはできない。

此論文は全體に於て緊縮を缺き且つ同樣の考へを繰返すのみにて、未だ論文の目的とする所を言明しても居らず又證明もして居らぬ。雜誌の都合上、不本意ながらその紙數をみたすこととした。